

七部集大鏡

序





月院社何九撰釋

俳諧 七部大鏡

書肆

巢枝堂梓

冬乃日

初懷紙

春乃日



七部集大鑑序

芭蕉翁七部集。其言脫塵  
凡。其句二高尚。後人為之  
注釋者。凡四十七家。彼此  
出入。精麁相半。未得其髓  
矣。翁居則一瓢之米自析  
之。出則一挑之袂。親搭之。  
嘯月嘲風。無所住着。所謂  
幽人之貞者歟。宜矣。淺近  
凡俗之士。不能究其意也。  
科野何丸。學公羽之正風者  
也。冀思研精。七年於茲。博



搜故事。遍檢古書。為之集  
解。名曰七部大鑑。其意蓋  
在於懸明鏡以照四十七  
家之妍媸云。文化六年己巳  
秋九月。書于科野吉田行次

江戸 鵬齋老人識



此 鑑 七 部 集 小

注 釋 を 加 へ 大

鑑 と ち 々 七 部 集

を ち 々 小 中 大 信 濃 の



何れがたふれをい  
おのゝちめふの  
とくきも本了れは  
辞にうたふい

言にいそむちの  
深切知るま  
ちのよき

きくはる色



文化五年八月

年樹叟士朗

二集撰る西書

編輯

いそ進品ののたつ後一著者あつたは  
と上方お風土うあはす〜  
〜お〜の徳書く用て上方  
うハ一なるもお〜  
〜  
ハ七部を唱る書を印する

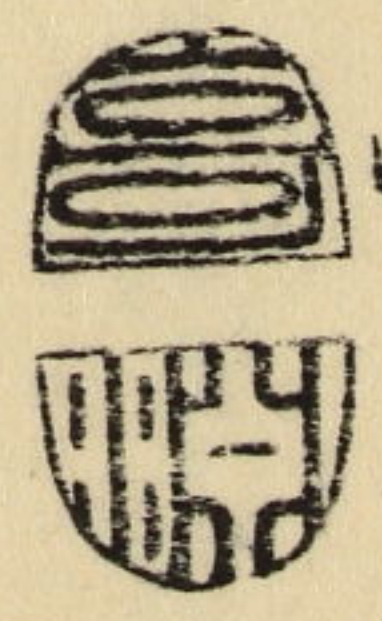






ちうねん人...  
とくを...

始華一六...



右人...  
有...  
...  
...  
...



器の大小一々  
了也けつ孫麻呂のたら  
る家少や志好の社  
園志何丸地乃全  
心成又もて心一

鍛錬一多るを  
大鏡と物つく  
了好皆る秋毫中  
流一と好なる事  
好系し



文化丁丑冬

守安

月居

藏

そ後、  
か知れぬも、  
若くそ末に、  
韓河、  
ふりかけ、  
ふり下、



かす  
身  
あ  
く  
礎  
神  
そ  
乃  
及

乃  
何  
流  
足  
鏡  
去  
そ  
入







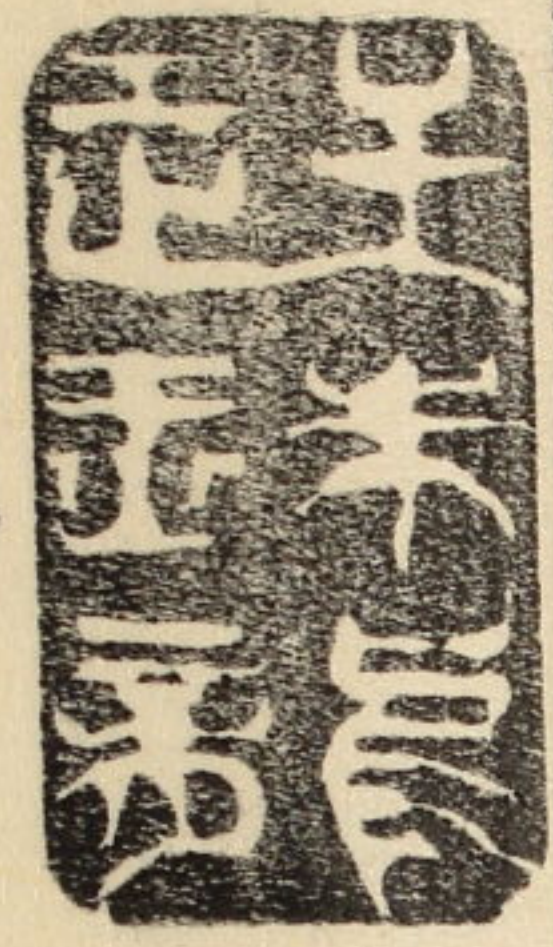




あはれなる御心  
あはれなる御心  
あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心



四規とては鏡ももてし  
てはあはれなる御心  
な―あはれなる御心  
千里のあはれなる御心  
あはれなる御心  
あはれなる御心



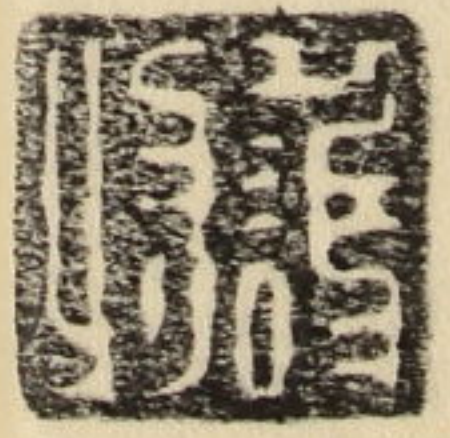
かゝるに似たるもの事  
いふ事なくも、  
なほして、  
来ふは、  
後、  
子、  
は、  
も、  
年

この、  
金、  
ま、  
え、  
と、  
な、  
ら、  
か、  
か、  
年、  
は、  
か、  
か、  
年



りの玉の山らのめのもる羊の  
初まゝしつゝ後にもあはれあはれ  
をかくしの神よりけりし  
すゝもくしとくはにあり  
くゝ魚くは者何九のせき  
あゝゝゝゝ

その中 書物 翠の鳥 獲物



昔より書籍の海をよけし海を  
まもれ少かゝる中にも向秀の  
季のく源氏其功の吉の鳴る  
友何九の世に在ぬれ七部の  
能く安千里を信るるを歎き  
手は此一筋の魂をいきて和漢の



書に脈をばしし古蹟のあまの田園を  
あはれむるはるのあはれし今や  
梓よちりそあせよ公よせし  
流るる此大鏡天下のあはれ  
事いかにあはれしあはれし  
舊門よあはれしあはれし  
えんあはれしあはれし  
流妙の佳境よもあはれし  
昔のあはれしあはれし  
あはれしあはれし  
あはれしあはれし  
あはれしあはれし  
あはれしあはれし  
あはれしあはれし  
あはれしあはれし  
あはれしあはれし



今ハ悉ク一人所爲ノ形跡ヲ求メカ  
テ大業ニシテ其ノ事ヲ以テ其ノ  
屏<sup>ニ</sup>強<sup>ク</sup>守<sup>ル</sup>事ヲ以テ其ノ事

東朝玉葉之卷

其ノ事

志<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>何<sup>レ</sup>九<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>七<sup>ノ</sup>部

大鏡といふ事と上東事

より一<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>事

人<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>事

玉葉ノ卷ノ事ノ事ノ事



の山と何と云ふものなるが  
あゝ六世句の両端はわら  
てそ持てさゝあゝま  
たゝまゝかゝるは  
よめまゝ其考乃正

一かゝるは具原ま  
あゝは生さゝあゝ  
またおとろふこの大業  
のあゝかゝるはさ  
あゝは是利み庫の傍



ふり〜のゆりおの再生  
をわね〜る

しこ老漢

9



信言の何の〜る  
なご翁を交深き  
辰間のみ〜用字  
わが我庸録の〜る



ふしの叙をきよき  
陣の詩多し序既あり  
今スレ何をよい大世  
は〜〜ゆゑ容貌半  
觀ル二年七の敷音声

其の物心又蕉翁の七部  
のさ〜〜あ〜〜を既  
上木る集註け及の  
金園とす人世の人  
の感〜〜馬



備急乃功より  
 るんとしあをる  
 冠の書るるの

北律雪成北元



引用書目

法華經 法苑珠林 悲華經 報恩經 十王經  
 孟蘭盆經 傳燈錄 梵網經 文殊經 般若經  
 高僧傳 因果經 知度論 明心法鑑 諸乘法數  
 千手經 僧史略 造教經 涅槃經 禪林類聚  
 史記 前後漢書 晉書 南史 宋書 周書  
 唐書 宋史 通鑑紀事 素書 廣雅 戰國策  
 六韜 易經 書經 詩經 禮記 春秋 左傳  
 春秋元命通 史記正義 易候 五經通義  
 詩經正義 曲禮 周禮全經 論語 孟子 晉子  
 列子 莊子 抱朴子 淮南子 五雜俎 爾雅  
 酉陽雜俎 五車韻瑞 白虎通 琴操 荀子  
 風俗通 羯鞞錄 孔子家語 太平廣記 魏豹傳



典籍并覽 太平御覽 荆楚歲時記 事物紀原  
車林廣記 車文類聚 類書纂要 漢武故事  
前漢外戚傳 漢武內傳 車文後集 樂書  
翰墨全書 書言故事 寶典 雜五行書  
漢車始 杜氏通典 陳藏器 對類大全 唐令  
弁樂解 孫盛雜記 綿繡萬花谷 裘服小記  
冷齋夜話 續齋諧記 爰溪筆談 風土記  
焦氏筆乘 容齋隨筆 軒轅本記 春明退朝錄  
太一金鏡經 祖庭車苑 三秦記 四部稿選  
黃帝內傳 韓文 柳文 潛確類音 占書  
十節記 尋到源頭 玉燭寶典 論秩論 幽吟錄  
唐韻 溫公詩話 瑯琊代醉 拾遺記 教坊記  
歸田錄 擊蒙要略 帝城景物略 古今原始  
通曆 義楚六帖 學齋佔畢 出曜經 名義集

繫辭 通鑑齋記 寒山詩集 山海經 通典  
樂府雜錄 遊仙窟 呂類車實 新論 論衡  
太白陰經 魏略 楚辭 皇圖要記 蜀王本記  
帝王世記 墨子 植子新論 壬中記 古史考  
物理論 三禮圖 大戴禮 古今注 海錄碎事  
毛詩 仙傳拾遺 管子 世風記 月令廣義  
歲華紀曆 古樂府 漢雜事 講德論 通論  
漢武策 毛詩傳義 涉世錄 玄妙內篇  
諸子娘孃 東觀漢記 秦書 顏子家訓  
笑苑類彙 通載 格物記 困元遺事 西京雜記  
晉朝雜記 南越志 統晉陽秋 輟耕錄 洞冥記  
退耕錄 說苑 孫氏世錄 異苑 世說新語補  
養生論 蒙求 成語考 彙編海集 統世說  
格物叢話 陸佃埤雅 鶴林玉露 聖言故事



聯珠詩格 小說 搜神記 神異經 錢神論  
小學 神龜論 質龜論 畧錄 劉向五行傳  
相鶴經 蔡邕獨斷 仇池墨記 集林大斗記  
大明一統志 華陽風俗記 禽經 獸經 博物志  
運斗樞 天文志 韻府 麗居士治錄 韻會  
說文 句略 圓棧活法 三才圖會 造化論  
神仙傳 高士傳 隱逸傳 列仙傳 才上傳  
文選 古文 朝詩外傳 本草小品方 病源論  
三體詩 錦繡段 杜律 白氏文集 李太白詩集  
山谷詩集 東坡詩集 朱子治錄 詩經齋風  
名物彙解 沈存中華泐 溫故日錄 四六文章  
東齋隨筆 江湖風月集 石林待話 詩入玉屑  
萃巖經 僧祇律 金剛經 德義經 朝野群載  
舊事紀 文德實錄 故事紀 日本紀 類聚因史

神皇正統記 本朝通鑑 諸社根元記 日本史  
藤原系圖 和漢朗詠集 延喜式 續日本紀  
本朝通史 本朝列仙傳 藤原抄 倭姬世記 人史  
扶桑搜神記 日本後紀 清輔奧義抄 職員令  
神社考 菅家御集 清輔雜抄集 和歌色紫抄  
元亨御書 中右記 名月抄 教氏要覽 家礼  
万葉集 資道什物記 本朝月令 新撰万葉  
古今集 八雲御抄 後拾遺集 統古今集 江記  
後撰集 新古今集 統拾遺集 新勅撰集  
新後撰集 金葉集 統後撰集 千載集 詞苑集  
統子載集 統後拾遺集 新後拾遺集 玉葉集  
風雅集 新統古今集 拾玉集 小町家集 賴政家集  
山家集 西行家集 俊賴家集 丈夫集 伊勢家集  
信明家集 名寄集 堀川百首 堀川後百首



攀白集 藤川百首 新明題集 六百番歌合  
曾我物語 十寸流 埃囊抄 古今采雜抄  
久安百首 正風俗抄 悅目抄 和名抄 六帖  
仙覺万葉抄 古依日記 清輔袋草紙 竹取物語  
源氏物語 伊勢物語 落窪物語 大和物語  
榮花物語 世德物語 続世德物語 仁吉物語  
平家物語 今昔物語 狂雲集 十六夜日記  
梁塵愚抄 耳底記 宇治拾遺 長明發心集  
撰集抄 徒然草 江家次第 長明道之記  
無名抄 公事根元 長明方丈記 年中行事  
長明海道記 春乃曙 河海抄 長明伊勢之記  
新撰髓腦 花鳥余情 拾芥抄 源平盛衰記  
清少納言 井蛙抄 江源武藏 日本灵异記  
文献通考 根本律 聖言故事 微書記物語

篇中抄 文章軌軌 春雨抄 遠嶋御百首  
歌道鈞物 曉華抄 扶桑略記 本朝列女傳  
羅山集 天文雜記 北條五代記 和漢合運  
善隣国宝記 草山集 下学集 長明文宇錄  
圖繪寶鑑 古事談 公卿補任 古今著聞集  
懷風藻 続古事談 一円雜談集 大成經  
本朝年鑑 和漢三才圖會 十洲抄 東西夜話  
千五百番歌合 隱逸傳 続隱逸傳 民家宣忌錄  
太平記 旧遺考錄 女郎花物語 源語秘決  
枕花甚茶系 江談抄 本朝醫考 日本歌名  
禁秘抄 膾餘雜錄 雲谷雜詠 覆醬集  
行狀記 南浦文集 和歌八重垣 要筆傳 海人藻芥  
掌中曆 大和本草 高名錄 武用弁略 兵具廻談  
篁之記 言塵抄 醒眠記 東鑑 兼燭潭 歌枕



全浙兵制 新田軍記 卷懷食鏡 隨圃記 一休咄  
 後太平記 名物六帖 素堂家集 竹齋物語 大鏡  
 大原十句 藻詠系 武備志 古刀銘鑑 和事始 畫史  
 算學啓蒙 年山紀聞 砂石集 京羽二重 東海記  
 詩經抄風 三國語林 名物弁解 多識篇 退私錄  
 沈存中華談 温故日錄 東社法華 石林詩話  
 江湖風月集 詩人玉屑 四六文章 貞觀式 和字正鑑鈔  
 畸人傳 玉海抄 玉京記 養生論 金剛經 萃叢經  
 北山抄 世語問答 吳竹集 三餘抄 東園紀行 保元記  
 康富記 怪異弁談 誓教古 醉醒集 食物本草  
 笹波問答 國史實錄 行厨集 祚名帳 仇物語  
 北条盛衰記 漢語抄 西行伏集  
 此外為款連排の書目少くはと只ともよと之付  
 多事ハ略一早

芭蕉翁俳諧口決

或云北枝傳 或云止風傳

格不入て格をたてらるゝとなく格不入をり何ぞ  
 邪語よきか格不入格を出てけりめて自在を  
 得る一 詩歌文集を味はれて心を向上に  
 一路ふあつて作を曰海よめらるるす巻一  
 子羊不易一時流り 他のれ句より彩色の  
 出とく我のれ句を墨線の出とくす一水ふ  
 少きてなる彩色るるきよもあつて心徳のよう  
 たりてさうい志をりを身一とす 名人多地を  
 よく潤る一うふおよ少きてをあやみき下よ  
 妙あり上なるはよきこところあよ面白あり  
 等類依例第一吟味す巻一 古今れ撰集よ  
 眼をささらす巻一 我のれ句流をそよよ人を



體れあひの百韻冬の月あけ日曠野ひさこ  
猿蓑炭俵等を勢覽すし一翁白を時代く  
をすしし 初心の時を句数を好むし一夫あり  
密時を日とら大山を越て向ふれ林鹿一ト見ら  
あを棄すし一六天を越むと思へく將ふ七尺を帯  
むし一と進ん心言き時を邪路に入安くけく強  
低き時を古人の胸中をささるるありしは  
といひる中よりいしれものとお登す事ありを信終  
平わとの所れをえらる故あり信淡平和を安  
めさむし一為るありはくしるきさるるありをいひの  
たひといと覺えさるるありしきさるるに俳諧ハ  
万葉の意る進ん貴とあり細とあり味りし  
屋きさるる唐明すして中禁れ家傑し  
初るるあり一唯心のいさしきを辰守中す

てふをともあるあり夫我邦をてふをんれ必  
る進ん先哲れ作を味らひ一西も藤末らる  
さし乳うれ 句の密をま柳の小面ふし進  
るるありし一してわくし微風よあやなすもあ  
しうし心る清月夜よむめれ白く歌はく  
あやをし一嬉る心裏の花をさあはねるあ  
れ月をす記す屋し

一書ふいしん屋るるを止風七部と称しけり  
りれありそりありあけ日流猿蓑をれらるき  
雲まありけ勢のあゆみをくも又を深川  
郊辰れ西集るるありし一ぬき家くのもの  
すきし一してその懸るきし一もあひん  
愚をれりらくすしてを耳りて守ふ人



此みまげく心もてきく人れいとしたりきく  
あまううふ本授ようときれとうこひふ  
あまひをうさね聞き心れみ抱くをうふるの  
ゆくまれもあまのあまの侍書まきせよ  
知まら人のまらまらとええぬまをけし  
めいあれをあまうぬぬまをまそのひり  
おもひをまうし忘まをまらぬとたこ  
やうくまう

一 冬 託 日 貞享三 戊子 年 出 板

一 初 懐 紙 貞享三 丙寅 年

一 春 の 日 全 拾 出 板

一 曠 野 元禄二 己巳 年 出 板

一 匏 瓜 元禄三 庚午 年 出 板

一 猿 蓑 元禄四 辛未 年 出 板

一 炭 俵 元禄七 甲戌 年 出 板

是冬十月十二日於難波旅飯辻化時年五十有一云

読きみのもろ祖海威後の書るりのを伊賀  
の連流翁此本必よ書れるやうに残るや  
と志きりのまらにのり高格のせま前よ瓜畑集  
望いぬ歌よて撰集を果さぬ此後うら  
あげうらよまらるるを撰ひてわすれ僅よ  
二百んりの書くよて開板をばやと有よ  
その年大坂よりて近化あまらよの空よ  
記まきまらよを増補して開板より附るの  
後りよまら祖海威後の句くをよみえ  
て適體とまらよをよみ改補の不詮  
るうらあまらよをよみ改補の不詮



を述る此并  
続らる并のを題書よ別巻を住して意蒙の  
便覧ふ充り

題号釋論

一 愚考凡教号をさるふ五重の義あり一曰名  
二曰體三曰宗四曰用五曰教なり此義ふらるる  
と考てを解す小發くさるるは誤多し  
一 その日五教仙并追加の表入合ふいりては  
をる孔卷改らるる孔體取ふゆりのぬき則  
體よりりて号するなり 體を他礼之切替く  
亦曰身なり  
一 神懷紙をさるふ号なり一是用なり用を余共  
之切ツカフなりモ千五なり説文曰用を可施行ト云

一 考此日五教はふ同し  
一 曠野を名するなり弥成之切号ルなり  
又曰才ホイ あり此集や花巻の月雪神  
新意を常名所古跡人を行るれよひ  
宗體守氏貞室西武宗因吉旨般齋  
その外他流の法事よいりてることふ  
極りるきく廣原よ比して名目する教号  
るり曠を廣るなり東西を廣ると云南北  
を長と云曠野を廣るなりと云ふ義之  
入全侍夫本集よ徳ふての撰集なること  
日本のは形をりて号する此教号なり  
夫本集を本名杖葉集なるを傳り  
て篇と冠を取て夫本とる号をり之  
その夫本集よりりての篇集なる事ハ



杖粟此地の形をとりて歎するなり肥前長門  
大坂長門越後長門信列長門都る南北一長  
き地なり廣く島廣津廣田却而廣くといふ  
字これ陶くは地を以て東西一廣くといふなり  
杖粟則東西一廣く一故も曠野とも題  
せり

附て云負介とわけて改るは誤る彼夫木  
集中上古よりその時代よりして万葉  
古今以下に撰集ふれざるを悉くあつめて夢想  
ふ授てはる歎号なり曠野も又代この  
集ふりて或る正風よ叶ふるを悉くひ  
らひ改つめて歎号なるもの集れ余なるれ  
と負介とをそふ号ししてなるものなり  
一 瓶を右ふれりしして名なるは此集を

大津に称頌の篇集るは彼に湖の瓢  
を本中して歎するは号なり於集の序  
文に注釈しよ委し一と述は略す

一 杖蓑と宗あり宗と祖と之切能なり又曰むこ  
流脈の出る地を宗と云杖蓑と蓑は海一派の  
隋誓と号れ故に巻改の一句をりて歎号す  
何流何脈何宗といふ等し一杖蓑の文章  
の漢文よ委し

一 炭俵を教るなり教る居孝之切令なり  
誨るなりサツクルなりニキヒクあり祖翁の獨  
言をとり居てその後号する故も誨るを  
教るなり歎号ししくる集れ序より論す  
る一素者此面し此五義を繼とすすむハ  
おそらくもあやうらむなり百れ書籍を



五巻のあはれ



狂雷堂といふ一書よまはるがまじりよき  
先字本のふとまはるがまじりよき  
是をも物のまはるがまじりよき  
よく仔細をいふまはるがまじりよき  
なるは擲もいふまはるがまじりよき  
まはるがまじりよき  
よきまはるがまじりよき



のすまゝにハサミで切捨てる人だけおぼ  
つてゐるのハ友人何磨歎きふや迄き  
月日をつゞるの日に下をぬくのがあつて  
まゝ袂を擧げると七部大鏡のまゝ  
あつたわつたも鏡のつゞるまゝ  
あつたわつたも鏡のつゞるまゝ  
雲子本持のおまけのふりまゝ  
はなはたのちやうどあつたまゝ

左の解りまゝのおおつた名を  
こゝろひよきまゝ彼方大沖の物  
まゝまゝの筆も心を凝らす  
中はまゝのおまけの編者のまゝ  
おまけの刻成て集むる人か  
まゝの書肆の紙をたつた  
まゝのまゝ

文のまゝ

ハナハタ





